

上毛新聞で故高橋会長が紹介されました



「榛嶺の学舎に育った作家たち」より

高橋房雄（1937-2020年）は、幼少の頃から器用で絵が得意、小さな舞台を作ってサーカス団のマネ事をしたり、絵入りのメロンを自作したり、中学時代は新聞部に所属し風刺画や政治漫画を描いていた。美術との決定的な出会いは、中学3年の時に見た美術雑誌『みつゑ』に掲載されていたパウル・クレー作の

渋川市美術館・桑原巨守彫刻美術館

高橋 房雄 《カオスへのこころみ
—未来への勇気のために—

窓の風景で線を探求

《陽気な食卓》である。高校卒業後は、東京で印刷会社に勤めながら会社に在籍していたデザイナーらの中で美術に触れる機会にも恵まれ、独学でも作家の道を歩み続けることができた。

1963年の第40回春陽展へ初出品で初入選し創作活動を本格化させた。本展の開催を控えた6月に他界してしまっただが、最期は、あまり自由のきかなくなつた身体でゆつくりと縁側で過ごすことが日課となつた。そして鉛筆とスケッチブックを手にして窓越しに見える風景を描き、線の探求をしていた。今回の出品作は、生前「命の姿を描きたい」と語っていた高橋の思いが込められ、それまでの白黒版画から展開させ2013年頃から本格的に取り組まれた色付き作品の傑作である。

（須田真理・渋川市美術館・桑原巨守彫刻美術館学芸員）

11月22日まで。一般
300円など。火曜休館。

上毛新聞(2020年10月31日)に掲載

現在、渋川市美術館・桑原巨守彫刻美術館で「渋川高校出身作家展—榛嶺の学舎に育った作家たち」という企画展が開催されています。

その中で、弊社の故高橋会長について上毛新聞で紹介されました。

この企画展は11月22日までですが、機会がありましたら渋川市美術館に出かけてみてください。